

令和元年6月17日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02186

研究課題名(和文) ドイツ神秘思想におけるテオシスの伝統 キリスト変容図を手がかりにして

研究課題名(英文) The tradition of theosis in the German mysticism, using the image of Christ's transformation as a clue

研究代表者

田島 照久 (Tajima, Teruhisa)

早稲田大学・文学学院・名誉教授

研究者番号：50139474

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、西方教会の「ドイツ神秘主義」が説く「魂の内における神の子の誕生」の教説を、東方教会の「テオシス」(人間神化)思想の系譜に連なるものとして捉えなおし、東方正教会とは異なる独自のテオシス理解があることを明確にした。神が人となったのは、われわれを神にするためである、とアタナシウスが語るように、受肉は人間神化(テオシス)のためにあるとする受肉の目的論的範型理解が東方教会ではなされてきた。同じ理解がエックハルトの思想の核にあることを論証した。「誕生教説」を神秘体験ではなく「イエスを通じて人間は神の子らとなった」という自覚に至る目覚めの体験として位置づけた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまでローマ・カトリック教会には、東方教会の霊性を形作る「人間神化」(テオシス)思想はないとヨーロッパの研究者達は考えてきた。しかし本研究の成果から、これまで個人の神秘的体験の言説として「ドイツ神秘主義」の名で呼ばれてきたエックハルトの思想が、古代ギリシア教父以来の「人間神化」(テオシス)思想の伝統に連なるものであることが論証された。この研究成果により、「ドイツ神秘主義」という呼称は時代とその対象を指し示す呼び名としてはこれまで通り使用されても、その内容をさし示す呼称としては不適切であり、「テオシス思想」とされるべきものであることになる。

研究成果の概要(英文)：This research aimed to elucidate how unique the German Dominican Meister Eckhart's doctrine of "the union between God and human" is within the Christian tradition of theosis originated from Greek Fathers in the early Christianity. Our particular approach was to compare Eckhart's doctrine with the Christology which is visually expressed in the icons produced in the devotions to Jesus Christ who is defined in the orthodox dogma as God-man in one Person. Our preliminary investigation of diverse icons discovered the image of Christ in the transformation. This result was then contrasted with Eckhart's understanding of the Incarnation which intends to reinterpret Christ's soteriological role as expanding the possibility of such Incarnation for all humankind. Namely, Eckhart explains such union as the birth of the "just person" from the "justice as such" (God Himself), which is "analogically" related to the birth of the Son from the Father in the Trinity.

研究分野：宗教哲学

キーワード：ドイツ神秘主義 中世哲学 キリスト教図像学

1. 研究開始当初の背景

ドイツ神秘主義思想の中心的思想家であるマイスター・エックハルト (ca.1260-1328) は、その著作、説教の中から 28 箇所が抜き出され、内 17 箇所が異端的言説であると断罪された、ドイツ・ドミニコ修道会の行政的最高位にあった当時を代表する神学者である。

断罪された言説の内 7 箇所が「魂の内における神の子の誕生」の教説を踏まえた「神と人間の一致」に関するものである。こうした教皇ヨハネス 22 世の断罪によって、魂の内には父なる神が子を産み、それにより人はイエス・キリストと寸分たがわぬ神の子となるという救済論的言説は伝統的なカトリック神学から逸脱する神秘家の説として受け取られてきた経緯がある。とくに魂が三位の神のペルソナを突破して神性へと帰還するというドイツ語著作で繰り返し展開されている「神性への突破の教説」はスコラ学や神学の伝統的理解とは相容れない神秘的合一の典型的言説とみなされてきた。

しかしながら 1936 年以来編集者の世代を継いで脈々と続けられて来たラテン語著作・ドイツ語著作批判版エックハルト全集刊行がほぼ完成を迎えようとしている現在、学問的検証を経て提供された膨大な資料群を活用したさまざまなエックハルト理解が近年続々と登場してきている。ドイツのポツダム大学を中心とした研究者によって、トミズムの枠内には納まりきれない、ラテン語著作で展開されているエックハルトの存在論、知性論を、シュトラースブルクのウルリヒ、フライベルクのディートリヒ、モースブルクのベルトルート、リューベックのヘンリクス等のドミニコ会思想家を含めた「アルベルトゥス学派」ないし「ドイツのドミニコ会学派」の思想的文脈の中で理解しようとする試みが精力的になされている。

こうした思想史的な文脈におけるエックハルト思想の位置づけと並んで、とくに現在エックハルト研究の焦点ともなるべき課題は一般民衆に向かって自在に説かれた母語によるドイツ語説教がいかなるエックハルトの神学体系から語りだされているのか、どのようにカトリックの神学伝統を踏まえているのかといった問題である。ドイツ語著作をラテン語著作から基礎付け解釈するといういわば「エックハルト思想の再帰的自己解釈作業」である。「説教者の兄弟会」(Ordo Praedicatorum) としてのドミニコ会では説教こそが最も重要な宗教活動であった。

研究遂行者はこうした解釈作業に関して、これまで異端断罪されたものの一つであるドイツ語著作中の「被造物は純然たる無である」という言説をラテン語著作で説かれる「内的帰属の類比」構造を介して、存在論の地平で、統合的に解釈することを試みた(拙著『マイスター・エックハルト研究』1996 年創文社刊、69 - 173 頁)。

また「魂の内における神の子の誕生」というドイツ語著作のテーマが、ラテン語著作において「始原」と「始原から生みだされたもの」という「本質的始原論」の論理構造に従って、「義」(神の完全性)からの「義なる者」(義である人間)の誕生としてアナログ的に語られていることを確認し、その論理構造を明らかにした。その結果エックハルトの主張と異端判定理解との間には明らかな乖離があることが判明した(「エックハルトにおける〈本質的始原論〉と〈義なる者〉」早大文学研究科紀要第五七輯、2011 年、3-19 頁)。2014 年エックハルト・ゲゼルシャフト主催のミュンヘン国際学会の招待講演「エックハルトの離脱と禅仏教の三昧思想」の中でドイツ語著作の離脱をラテン語著作の恩恵論から基礎付けた。

2. 研究の目的

本研究ではエックハルトの「テオーシス」(人間神化)思想の実質的内容をなす、ドイツ語著作で展開されている「魂の内における神の子の誕生」の教説をエックハルトのラテン語著作の「キリスト論」という観点から神学的に跡付けることを目指すものである。本研究計画の基本コンセプトは正統とされた三位一体論の提唱者アタナシウスが語った次のような言葉に依拠している。

「この方(ロゴス)が人となられたのは、われわれを神とするためである」(『ロゴスの受肉』)。人間が神の本性に与って神に似たもの(似姿)として人間存在を完成させる、すなわち「人が神になる」というギリシア教父たちのテオーシス(人間神化)思想は、「神が人となった」という受肉思想を根拠として語られているのである。古代末期のラテン教父アウグスティヌスも同様に「神は人間になられたが、それは人間が神になるためである」(説教 128,1)と語っている。

神の受肉は人間の神化のためであるとするこの言葉の前半にある「受肉の教義」については、エックハルトのラテン語著作中の主著と目されている晩年の著作『ヨハネ福音書注解』第 116 節から 121 節の解釈を中心にしてその全貌を浮き上がらせることを試みる。エックハルトは「ヨハネ福音書 1・14」(新共同訳：言は肉となって、わたしたちの間に宿られた)をウルガータ訳聖書に従って文字通り「言は肉となって、わたしたちの内に住んだ」と受け取り、「言が」ただ単に「肉になった」だけではなく、「肉になった言がわれわれの内に住んだ」ということは、「恩恵の上の恩恵」、「恩恵に次ぐ恩恵」であるとする。このテキスト箇所の解釈と分析がエックハルトの受肉理解の骨子となるはずである。つぎに人間は神の似像であるという伝統的な解釈をエックハルトはどのように受け止めているかを探る。

次の段階としてドイツ語著作の「魂の内における神の子の誕生」の教説を、ギリシア教父以来の「テオーシス」(人間神化)思想の観点から新たに捉え直す作業に入ることになるが、「魂の内における神の子の誕生」とは離脱した魂に神が子を産み、われわれはイエス・キリストと寸分たがわぬ神の独り子となる、という教説であるが、子である神と魂の一致という人間神化のあり方がなぜ「誕生」というモチーフで語られるのかを『ヨハネ福音書注解』を主なるテキ

ストとして探る。

ギリシア教父以来の「テオーシス」(人間神化)思想は13世紀に入りギリシア正教会のグレゴリオス・パラマスによって教義的な完成を見る。パラマスはアトス山の修道僧ヘシカストたちの古来からの修道法を弁護して、神の働き(エネルゲイア)を受け人間神化した者はこの世の生において神を光としてみることができると説き、その根拠としてあげた聖書の記述が、タボル山上、ペトロ、ヤコブ、ヨハネの3人の弟子の目の前でイエスが光り輝く姿に変わったという「イエスの変容」の箇所である。変容したのはイエスではなく、弟子たちがテオーシスにより変容し、イエスの神性を光として見ることができたと解釈するのである。イエスの神性を自らの神性によって認識したということである。この「イエスの変容」をテーマとした図像が「キリスト変容図像」であり、東方教会では特に好まれて描かれるテーマであるが、ローマカトリック教会ではあまり見かけることが無い。

しかしきわめて興味深いローマカトリック教会の作例がある。ラファエロの「キリスト変容図像」(1517~20年、ヴァチカン美術館蔵)で、イエスは両手を大きく開き高く上げている「オランズ」という伝統的な祈りのポーズをとっている。通常は祈る側の信徒が死者の復活や救済を求めるとるポーズであるが、例外的にキリストがこのポーズを取るときがある。それは人類を神に執り成すときである。

人間神化を表す図像が執り成し仲介するオランズ型キリスト像によって描かれていることの解釈をさらに作例を集め検討することになる。さらにはオランズ型キリスト像の由来を聖者伝や民間伝承に広く求めることを試みたい。

3. 研究の方法

「テオーシス」(人間神化)思想が何故エックハルトのドイツ語著作集においては「誕生モチーフ」をとるのが、更に「突破のモチーフ」へと何故展開するのかをラテン語著作から解析釈義する。さらに「テオーシス」(人間神化)思想の典拠とされた「キリスト変容」を表すキリスト図像がカトリック教会では執り成す仲介者を示す「オランズ型」で描かれたものがあることの神学的意味を解明する。受肉は人間神化のためであるとする救済論的意味づけの基礎をなしていると予想されるキリスト中心主義をエックハルトの思想文脈に沿って明確な論旨のもと論証を試みる。とくに「キリスト変容」を表すキリスト図像の釈義に関しては、それに先立つ図像の現地収集調査が必須となる。

神学・宗教哲学領域：

「魂の内における神の子の誕生」の教説は、ドイツ神秘思想の代表的思想家マイスター・エックハルトのドイツ語著作で繰り返し説かれる最も中心的なテーマであるが、「テオーシス」(人間神化)思想が何故エックハルトのドイツ語著作集においては「誕生モチーフ」をとるのが、この問題をラテン語著作から解析釈義する。その際キリスト教の三位一体論の父と子という神的ペルソナの差異に関してエックハルトはどのような解釈の伝統に立っているのかも検討する。

更に並行してラテン語著作『知恵の書注解』で「沈黙の静けさがすべてを包み、夜が速やかな歩みで半ばに達したとき、あなたの全能の言葉は天の王座から地に下った」(18・14-15)という章句に対するエックハルトの解釈を検討する。エックハルトは、アリストテレスの四原因に照らし神の言葉の降下は形相因のみが関係しているとして神の言葉の降下は一種の「形相的流出」とであると語る。その際、質料因は当然のこと、作動因、目的因も沈黙していなければならぬと説いている。この箇所のエックハルトの釈義から神の恩恵と魂の離脱の相関関係を導き出すことを試みる。さらにその「誕生モチーフ」がドイツ語著作集において、更に「突破のモチーフ」へとなぜ展開していくのかをラテン語著作から解析釈義する作業に移る。ドイツ語著作集における「神性への突破」の教説は、きわめて難しい哲学史的伝統受容の問題が絡んでいる難問中の難問である。突破の力そのものが「魂のうちのある名づけられない一つの力」といわれ、非被造的神的力といわれている。神性へと帰還する非被造的力はアルベルトゥス学派、ないし「ドイツのドミニコ会学派」の中心的思想家フライベルクのディートリヒの知性論に基づいて語られていると推測されるが、エックハルトの受容はそのような力が魂の内にあるということに留まっており、詳細な解釈も理解もドイツ語著作集においてはもちろんなく、ラテン語著作ではこの力への言及さえも無い。それゆえ「突破のモチーフ」の神学的釈義は知性論とは異なるロジックの文脈で行わなければならない。この作業が中心的課題となる。

研究目的の最後のものとしては、人間の神化のための根拠とされた「神の受肉」論をエックハルトはどのように理解しているかをラテン語著作中の主著と目されている晩年の著作『ヨハネ福音書注解』第116節から121節の解釈を中心にしてその全貌を浮き上がらせることを試みることである。

これまでは「テオーシス」(人間神化)思想の実質的内容をなす、ドイツ語著作で展開されている「魂の内における神の子の誕生」の教説を神の恩恵によってある時に魂の内に生起する救済論的出来事として捉える文脈で検討してきたが、上記のテキスト箇所からはまったく異なるエックハルトの理解が浮かび上がってくるであろう。神が人となったという救済論的出来事はわれわれの外で起こった範型(範例・手本)としてわれわれ人間ひとりひとりがいつか成就す

べき事柄であるのではなく、イエス・キリストが誕生した瞬間にすべての人間において同時にすでに生じた救済論的事実であるという理解である。イエス・キリストの誕生によってわれわれすべての人間の人間の本性は神性と結び付けられたのであるという究極的な救済論である。こうした立場からは「魂の内における神の子の誕生」の教説とは、救済論的事実に無知である在り方からの解放、覚醒として説かれていると解釈できるであろう。こうしたエックハルト解釈の着想をエックハルトのラテン語テキストの正確かつ精緻な解釈を通じて論証することが本研究計画の究極的な目的となる。

図像学領域：

人間神化を表す図像が執り成し仲介するオランス型キリスト像によって描かれている例外的な作例としてラファエロの「キリスト変容図像」(1517~20年、ヴァチカン絵画館蔵)は広く知られているが、このほかにも同種の作例がローマカトリック教会にあるかどうか平成28年度はイタリアを中心に調査を進める予定である。さらにラファエロの「キリスト変容図像」の内にはいわばキリスト教の教義的・文化誌的図像コードといったものがふんだんに輻輳した形で存在している。こうしたコード解釈を「イコノグラフィ」(図像学)の研究手法を用いて遂行し、キリスト教教義の民衆レベルにおける受容の姿を浮かび上がらせることをめざしたい。「キリスト変容図像」の類型化のために出来る限り多くの作例を収集することに努める。そのために現地調査をイタリアを皮切りに行い、申請者自身による写真撮影を開始する。

4. 研究成果

本研究ではエックハルトの「テオーシス」(人間神化)思想の実質的内容をなす、ドイツ語著作で展開されている「魂の内における神の子の誕生」の教説をエックハルトのラテン語著作の「キリスト論」という観点から神学的に跡付けることに成功した。

正統とされた三位一体論の提唱者アタナシウスが語った「この方(ロゴス)が人となられたのは、われわれを神とするためである」(『ロゴスの受肉』)という言葉は「神の受肉」が「人間神化」(テオーシス)を目的としたものである、という目的論的範型論の地平を開くものであるが、エックハルトの思想も受肉に対するこうした目的論的範型論理解が基礎となっていることを論証できた。人間が神の本性に与って神に似たもの(似姿)として人間存在を完成させる、すなわち「人が神になる」というギリシア教父たちのテオーシス(人間神化)思想の伝統は、エックハルトにおいては「魂の内における神の子の誕生」として説かれているが、彼のラテン語著作『知恵の書注解』の解釈から神の恩恵と魂の離脱の相関関係を導き出すことに成功した。さらにこの「誕生モチーフ」が「突破モチーフ」へと展開されていく理由を「父性的神性の認識」というエックハルトのキーワードに沿って明らかにすることができた。さらに旧約聖書の「シラ書」の言葉「私の花は実である」のエックハルトの義解から、「因果同一」の立場より語り出される宗教的智恵についての考察ができた。こうしたエックハルトの思想を道元の「修証一等」の立場と比較したり、仏教の「因果一如」との共通性などの考察を行なうことができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

田島照久、「エックハルトの人間本性理解 インマヌエルという観点から」、『フィロソフィア』第103号、2016年

田島照久、「神化の伝統とエックハルトにおける神認識の問題 神〔の子〕の誕生をめぐって」、『中世思想研究』第59号、2017年

田島照久、「『私の花は実である』 エックハルト思想のマリア論」、『早稲田大学大学院文学研究科紀要』62輯、2017年

田島照久、「キリスト教と仏教の『智恵』表出の論理構造 エックハルトの『私の花は実である』(シラ書)解釈を手がかりにして」、『東洋学術研究』pp.304-327、2018年

〔学会発表〕(計6件)

第65回中世哲学会シンポジウム「東方神化思想と西方神秘思想 西方キリスト教における神秘思想」提題「神化の伝統とエックハルトにおける神認識の問題 神の〔子〕誕生をめぐって」2017年

日本宗教学会、「『私の花は実である』 エックハルトにおける因果同一の思惟構造」2017年

東方キリスト教学会、「エックハルトにとって受肉と神化の意味すること」2018年

日本宗教学会、「エイレナイオスとエックハルト - テオーシス思想の観点から -」2018年

同志社大学 CISMOR ワークショップ、「エックハルトのテオーシス思想における形而上学的構造 transcendentia 解釈の観点から」2018年

大谷大学真宗総研・立教大学キリスト教学研究科共催シンポジウム、「エックハルトにおける恩寵論 『私の花は実である』(シラ書24・23)の解釈をめぐって」2018年

〔図書〕(計3件)

田島照久他、Die Abgeschiedenheitslehre Eckharts und der Samādhi-Gedanke im Zen-Buddhismus, in *Meister-Eckhart-Jahrbuch Band10, Meister Eckhart-interreligiös*, pp.87-102, Verlag, W. Kohlhammer 2016

田島照久他、『ドイツ神秘思想<と>京都学派の宗教哲学』「エックハルト思想と京都学派 西田・西谷の関心の所在」, 教友社, pp.89-132, 2018年

田島照久他、『テオシス 東方・西方教会における人間神化思想の伝統』「総序」 「エックハルトの神化思想 『神の子の誕生』・『神性への突破』教説をめぐって」, 「タウラーの神化思想 エックハルト断罪以降という観点から」 「あとがき」, 教友社, 2018年

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8桁)：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。